

琵琶垣内遺跡(第2次)発掘調査報告

—三重県松阪市豊原町所在—

1999・3

三重県埋蔵文化財センター

序

このたび、県営ほ場整備事業に伴い消滅していく遺跡の一部を発掘調査いたしました。

この地域は、櫛田川左岸の沖積地で、近年の発掘調査によって郷土の歴史を究明するうえで重要な成果が蓄積されております。

さきに、昭和62年には県教育委員会によって、県道御麻生藪・豊原線道路改良工事に伴い発掘調査が行われました。調査の結果は、部分的ではありますが豊原地区における歴史を究明するうえから多くの貴重な資料を提供してくれました。

このたびの調査では、昭和62年の調査で発見された成果に関連する遺構が確認され、この地域の沿革を追究するうえからも貴重な資料になると考えられます。この発掘調査の成果が消滅した遺跡に代わり、郷土の歴史ひいては文化を伝え、活用されていくことを切望いたします。

なお、文末ながら、協議から発掘調査にかけて多大のご理解とご協力をいただいた県農林水産部ならびに松阪農林事務所、松阪市教育委員会をはじめ、発掘調査にご助力をいただいた地元の方々に心より感謝申し上げます。

平成11年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 大井 與生

例 言

1. 本書は、三重県松阪市豊原町に所在する琵琶垣内遺跡（第2次）の発掘調査結果をまとめたものである。
2. 本調査は、三重県教育委員会が三重県農林水産部より執行委任を受けて、平成9年度県営ほ場整備事業に伴って実施した。調査費用は、その一部を国庫補助金を受けて三重県教育委員会が、他を三重県農林水産部が負担した。
3. 調査は、下記の体制で行った。

調 査 主 体	三重県教育委員会
調 査 担 当	三重県埋蔵文化財センター（調査第一課）
	主幹兼調査第一課長 吉水康夫
	主査兼調査第一課第一係長 清水正明
	主 事 奥野 実
	主 事 中川 明
調 査 期 間	平成9年9月16日～平成9年10月31日
4. 調査にあたっては、三重県農林水産部農地整備課、松阪農林事務所、松阪市教育委員会および地元の方々のご協力を得た。
5. 本書作成のための整理作業および実測・トレースは調査担当者の他に管理指導課が行った。
6. 本書の執筆・編集および遺物写真撮影は、奥野が担当した。
7. 本書で示す方位は、すべて真北を用いた。なお、磁北は、西偏 $6^{\circ}20'$ （平成4年6月）である。
8. 本書で用いた遺構表示略記号は、下記のとおりである。
SD：溝、自然流路 SK：土坑
9. 本書で報告した記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。
10. 写真図版の遺物番号は、実測図の番号と対応させてある。
11. スキャニングによるデータ取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本文目次

I. 前 言	1
調査の契機	
調査の経緯	
調査の行程、調査の方法、文化財保護法に関する諸通知	
II. 位置と環境	2
III. 層位と遺構	7
IV. 遺 物	7
V. 結 語	11

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	3
第2図 遺跡地形図	4
第3図 調査区位置図	4
第4図 調査区遺構平面図及び調査区土層断面図	5、6
第5図 出土遺物実測図（1）	8
第6図 出土遺物実測図（2）	9

表 目 次

第1表 出土遺物観察表	10
-------------	----

図 版 目 次

図版1 調査区遠景（北から）	12
調査区南側（東から）	12
図版2 調査区北東側（南から）	13
作業風景（南から）	13
図版3 出土遺物	14

I. 前 言

1. 調査の契機

今回の発掘調査は、平成9年度県営ほ場整備事業（榊田上地区）に伴い実施された。琵琶垣内遺跡は、松阪市遺跡番号756の周知の遺跡である。当遺跡では、昭和62年度に県道御麻生園・豊原線道路改良工事に伴い、発掘調査が行われた。調査の結果、弥生時代末から古墳時代初めの大溝3条や古墳時代前期の竪穴住居2棟、奈良時代末から平安時代前半の掘立柱建物が5棟・井戸2基・溝10条などが見つかった。

今回の調査区はその東方で、当遺跡の第2次調査となった。調査に先立ち平成8年度に試掘調査を実施した。その結果、事業予定地の8,900㎡については遺構の存在が確認された。

これを受けて、県農林水産部と文化財保護の協議を重ねてきた。その結果、農業用水路敷設部分が遺構面に及ぶため、滅失する部分について本調査を実施することとなった。

2. 調査の経緯

(1) 調査の行程

発掘調査は、農業用水路敷設のために削平される部分について実施した。また、調査区の南方については、現用水路施工時に攪乱されていると考えられたため、調査は実施しなかった。調査期間は、平成9年9月16日～10月31日で、調査面積は600㎡である。調査を補助していただいたのは、地元の地区在住の方々である。記して感謝します。

岩塚慶次、太田千枝、太田よし子、小川つた子、大西うめ、北山清、小林美代子、園部はな、出口静江、出口とし子、出口康宏、中西紀美子、松本美佐子、森田きぬ子。

(ア) 調査日誌抄

- 9月17日 表土掘削開始。
- 9月18日 表土掘削終了。
- 9月19日 作業開始。
- 9月24日 21・22列グリッド検出、掘削。
- 9月25日 12～21列グリッド検出、掘削。
- 9月29日 21・22列グリッド再検出。
- 10月3日 1～11列グリッド検出、掘削。
- 10月7日 SD6・7・11の掘削。
- 10月9日 1～11列グリッド再検出。
- 10月13日 遺構写真撮影。発掘用具片付け。作業員終了。

10月14日 遺構写真撮影。遺構平面図作成。

10月15日 遺構レベル測定。

(2) 調査の方法

(ア) 調査区の設定について

調査区内を4m四方の升目で区切ることによって小地区を設定した。西から東へA～K、北から南へ1～22を配置した。

(イ) 遺構図面について

調査区全体の平面図は平板測量により縮尺1/100で作成した。各土層断面図は縮尺1/20で作成した。

(ウ) 掘削について

掘削方法は、表土・旧耕作土を重機で、包含層以下、遺構まで人力で行った。

(3) 文化財保護法に関する諸通知

文化財保護法（以下、法）等にかかる諸通知は、以下により文化庁長官等あてに行っている。

- ・法第57条の3第1項（文化庁長官あて）
平成9年9月17日付農地第78-4号（県知事通知）
- ・法第98条の2第1項（文化庁長官あて）
平成9年9月24日付教文第1546号（県教育長通知）
- ・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（松阪警察署長あて）
平成9年12月4日付教文第6—82号（県教育長通知）

II. 位置と環境

1. 地形的環境

琵琶垣内遺跡（1）は、行政上、三重県松阪市豊原町字琵琶垣内・閑浄寺・肥留場に所在し、櫛田川下流左岸の沖積平野上に立地している。標高は約11mで、現況は水田である。

櫛田川は高見山や国見山を源とし、途中多くの支流を集めながら北西流し伊勢湾に注ぐ全長約84kmの大河である。この櫛田川の下流域には、沖積平野

が展開し、水田を主とする農業が営まれている。

また、松阪市の地質は、領家変成帯や第三紀層・第四紀の洪積層・第四紀の沖積層に大きく分けられる。櫛田川下流域は、この中の第四紀の沖積層に当たり、砂礫を主とする地層で、地下に花崗岩や黒色片岩の礫が多く含まれている^⑧。

2. 歴史的環境

今回の調査に関連する弥生時代、古墳時代の遺跡について櫛田川左岸地域と櫛田川右岸地域に分けて概述しておきたい。

まず、櫛田川左岸地域については、沖積平野上に南北に遺跡が分布する。当遺跡の北方には櫛田遺跡群（2）がある。同遺跡群の瀬干古墳群からは、古墳時代前期の方形周溝群が見つかり、北ノ垣内地区からは、弥生時代中期や古墳時代前期・後期の溝などが検出された^④。

当遺跡の西方の石川遺跡（3）や浅掘木遺跡（4）中谷遺跡（5）・天王山遺跡（6）からは、弥生時代後期の土器が採集されている^⑤。

当遺跡の南方の山添遺跡（7）からは、古墳時代中期のS字状口縁台付甕や古墳時代後期の須恵器杯・土師器甕などが出土している^⑥。

当遺跡の西方の丘陵には、天王山古墳群（8）が、南方の丘陵には、西谷古墳群（9）や山添古墳群（10）・中山田古墳群（11）・やつで古墳群（12）・長谷古墳（13）などの古墳群が分布している。この内で、天王山古墳群からは、須恵器や埴輪が採取されており、出土遺物より5世紀後半から7世紀後半にかけて古墳群が形成されたと思われる^⑦。また、山添2号墳からは、須恵器や土師器・鉄器・馬具一式、勾玉などが出土しており、6世紀後半に築造されたと考えられる^⑧。やつで3号墳からは、須恵器杯や土

師器などが出土し、6世紀後半に造られたと思われる^⑨。

次に櫛田川右岸地域であるが、遺跡は自然堤防上に分布する。中の坊遺跡（14）からは、古墳時代の一辺8.5mの大型堅穴住居や土坑から50余りの土師器高杯が出土した。古川遺跡（15）では土坑が検出され、4世紀後半頃のS字状口縁台付甕が出土した^⑩。横地高畑遺跡（16）からは、弥生時代末の溝1条や古墳時代後期の溝2条・一辺約9mの方墳1基などが検出された^⑪。

祓川の右岸に至ると金剛坂遺跡（17）がある。同遺跡からは、弥生時代後期の方形周溝墓14基などが検出されている^⑫。寺垣内遺跡（18）では、弥生時代中期や弥生時代後期から古墳時代前期の方形周溝墓25基をはじめ堅穴住居など多数の遺構が確認された^⑬。コドノA遺跡（19）からは、弥生時代の甕や古墳時代の須恵器杯・土師器甕などが出土した。コドノB遺跡（20）では、弥生時代前期の方形周溝墓2基などが確認された^⑭。

コドノA・B遺跡の南方にある玉城丘陵には多くの古墳が分布する。神前山古墳群（21）は23基からなり、1号墳は画文帯神獸鏡が3面出土し、5世紀前半に造られたと考えられる^⑮。大塚古墳群（22）は22基からなり、1号墳は帆立貝式前方後円墳で5世紀後半から6世紀前半の築造と思われる^⑯。河田古墳

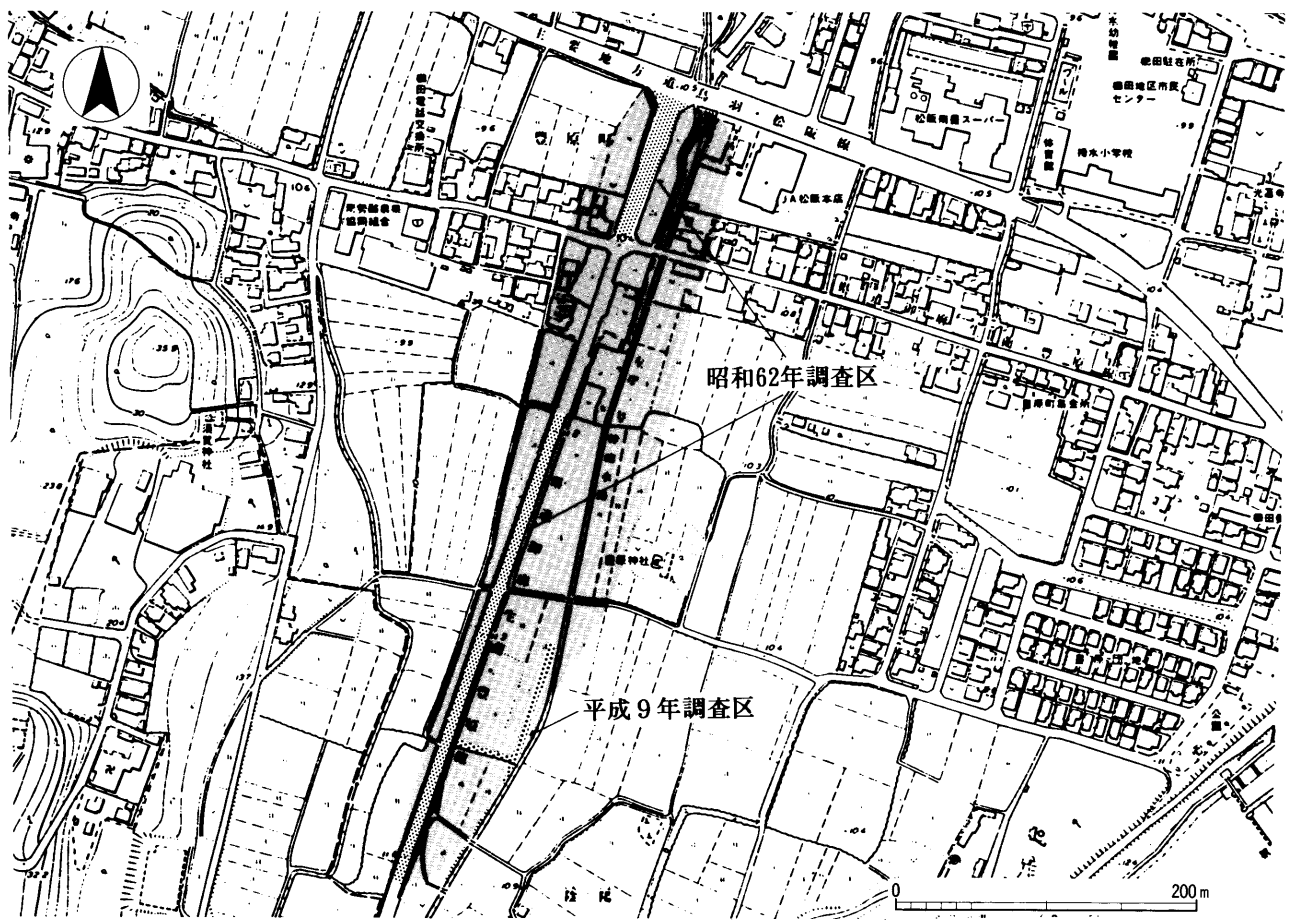
群(23)は100基以上からなり、今までに64基が発掘調査されている。調査された古墳は7世紀前後の短期間に造営されたと推定される^⑧。

以上のように、琵琶垣内遺跡周辺の弥生・古墳時代の歴史的環境について見てきた。櫛田川右岸地域

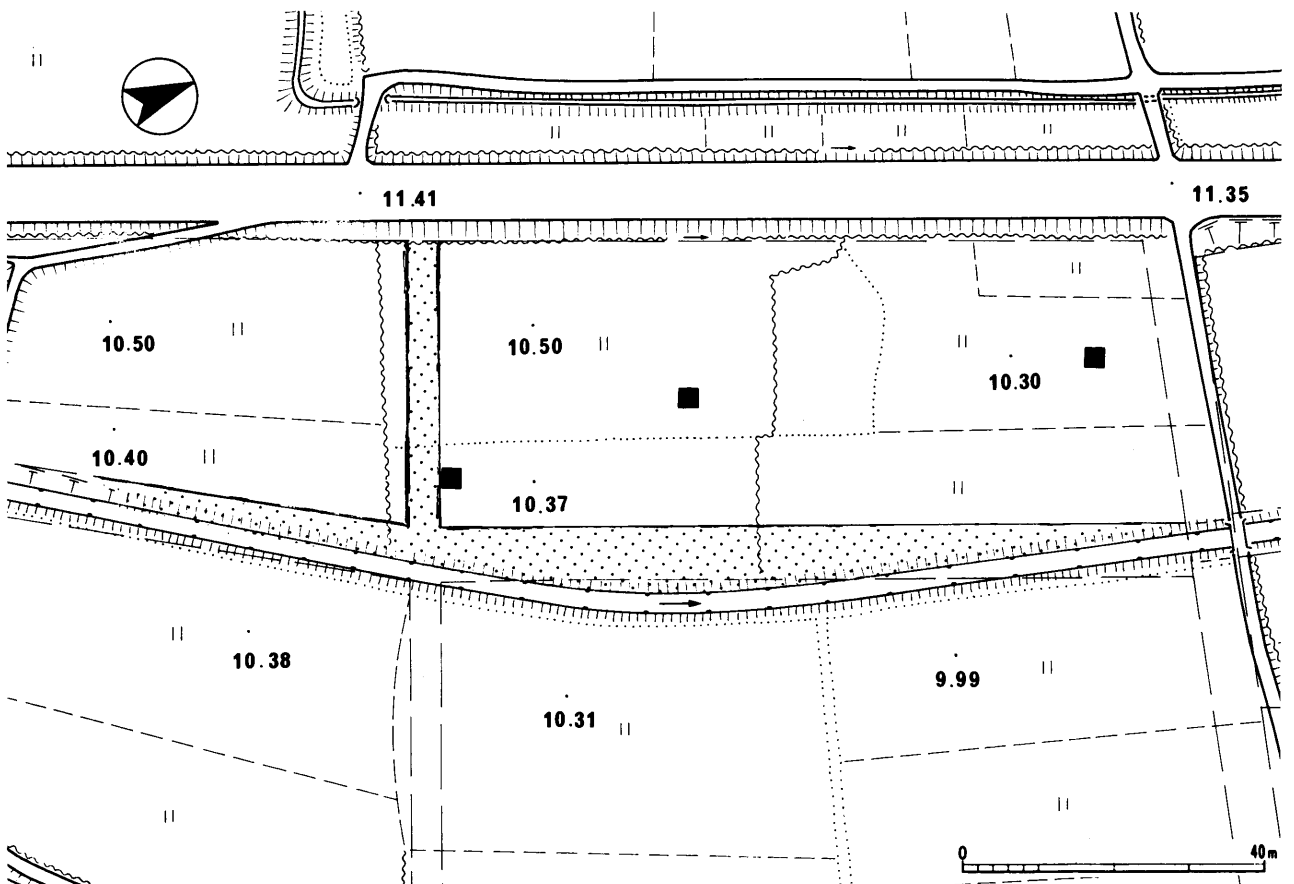
と左岸地域とを比較すると、右岸地域は弥生時代前期より他地域との活発な交流があり、弥生・古墳時代の住居跡も見つかっている。それに対して、左岸地域では住居跡の検出数は少ないなど、明らかになっていないことも多い。



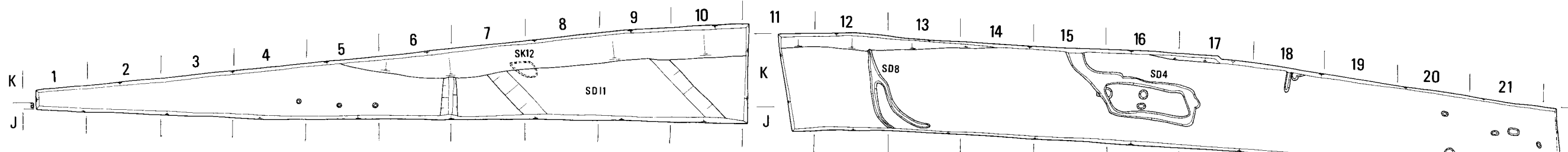
第1図 遺跡位置図(1:50,000 国土地理院『松阪』『国東山』1:25,000から)



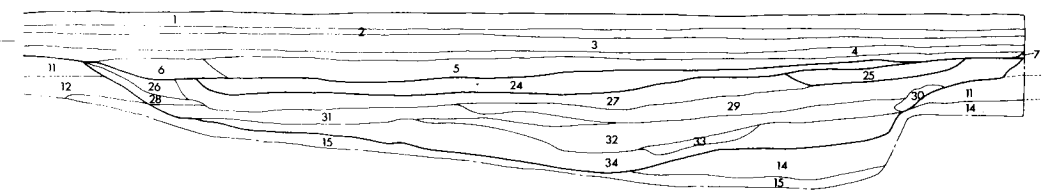
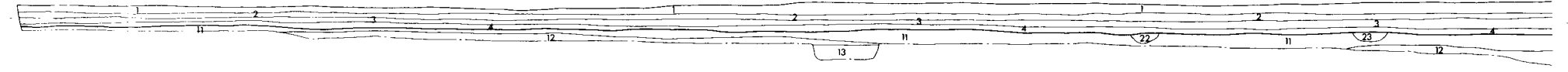
第2図 遺跡地形図 (1 : 5,000)



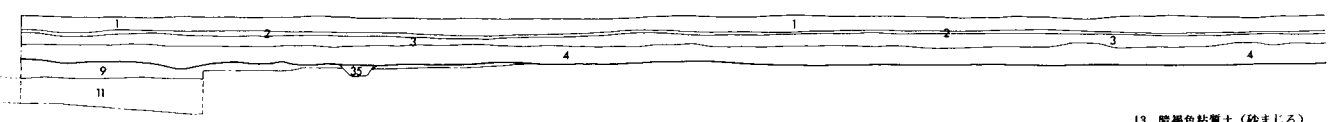
第3図 調査区位置図 (1 : 1,000) (■は試掘坑)



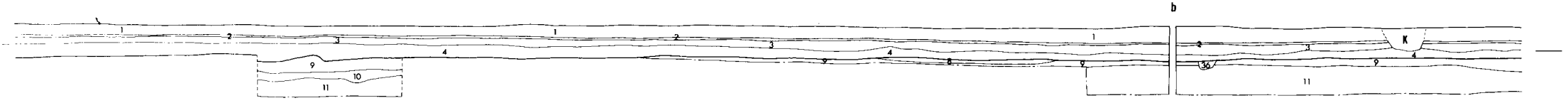
1. 灰黄褐色土 (耕作土)
2. 明黄褐色土 (床土)
3. 灰黄褐色土
4. にぶい黄褐色土
5. にぶい黄褐色土
6. 黒褐色土
7. にぶい灰黄褐色土
8. 黒色土
9. 黒褐色砂質土
10. 黒褐色砂質土+黒色粘質土 (ブロック状)
11. 黒色粘質土
12. 明黄褐色シルト



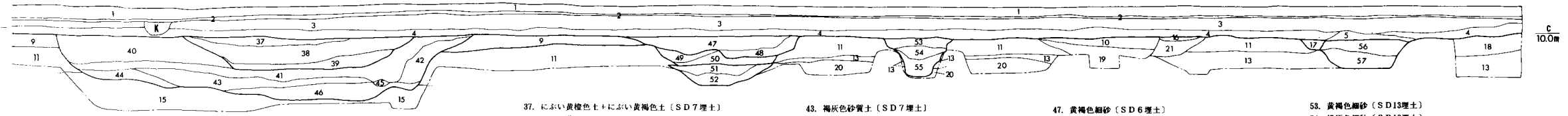
24. 灰黄褐色粘質土 (SD11埋土)
25. にぶい黄褐色土 (SD11埋土)
26. 褐色土 (SD11埋土)
27. 灰黄褐色砂質土 (SD11埋土)
28. 黒褐色土 (SD11埋土)
29. にぶい黄褐色砂質土 (SD11埋土)
30. にぶい黄褐色土 (SD11埋土)
31. 暗褐色粘質土 (SD11埋土)
32. にぶい黄褐色粘質土 (SD11埋土)
33. 褐灰色砂質土 (SD11埋土)
34. にぶい黄褐色砂質土 (SD11埋土)



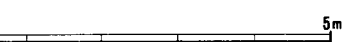
13. 暗褐色粘質土 (砂まじる)
14. 灰黄褐色細砂
15. 黒褐色粘質土
16. にぶい黄褐色砂質土
17. にぶい黄褐色土 (砂まじる)
18. 黄褐色細砂
19. にぶい黄褐色土 (粗砂まじる)
20. 褐灰色土 (礫まじる)



21. 暗褐色土 (礫まじる)
22. 灰黄褐色土 (pit埋土)
23. 褐色土 (pit埋土)
35. 灰黄褐色土 (pit埋土)
36. 灰黄褐色土 (pit埋土)



37. にぶい黄褐色土+にぶい黄褐色土 (SD7埋土)
38. にぶい黄褐色細砂 (SD7埋土)
39. 灰黄褐色砂質土 (SD7埋土)
40. にぶい黄褐色砂質土 (SD7埋土)
41. 浅褐色粘質土 (SD7埋土)
42. 灰黄褐色土 (SD7埋土)
43. 褐灰色砂質土 (SD7埋土)
44. にぶい黄褐色土 (SD7埋土)
45. 浅褐色粘質土+褐灰色砂質土 (SD7埋土)
46. 褐灰色土 (礫まじる) (SD7埋土)
47. 黄褐色細砂 (SD6埋土)
48. 明黄褐色砂質土 (SD6埋土)
49. 褐色砂質土 (鉄分沈着) (SD6埋土)
50. 褐灰色砂質土 (SD6埋土)
51. 暗褐色砂質土 (礫まじる) (SD6埋土)
52. 黒褐色砂質土 (SD6埋土)
53. 黄褐色細砂 (SD13埋土)
54. 褐灰色細砂 (SD13埋土)
55. 灰黄褐色細砂 (粘土まじる) (SD13埋土)
56. 黒褐色砂質土 (礫まじる) (SD1埋土)
57. 灰黄褐色シルト (礫まじる) (SD1埋土)



第4図 調査区遺構平面図 (1:250) 及び調査区土層断面図 (1:100)

III. 層位と遺構

1. 層位

基本的層序は、上から順に第1層：灰黄褐色土（耕作土）、第2層：明黄褐色土（床土）、第3層：灰黄褐色土、第4層：にぶい黄褐色土、第5層：

にぶい黄褐色土、黒褐色土、にぶい灰黄褐色土、第6層：黒色粘質土となる。第3層が遺物包含層で、遺構の検出面は第4層上面である。

2. 遺構

本遺跡では、溝7条、土坑1基を検出した。以下、各時代別に検出した遺構について概述する⁹。なお、遺構の深さは全て検出面からの数値である。

(1) 弥生時代中期の遺構

SD6 調査区の南部に位置し、幅2.9m、深さは1mである。深さ約0.5mの所から弥生土器壺などが出土した。

(2) 弥生時代後期の遺構

SD1 調査区の南西部に位置し、幅1.8m、深さは0.3mである。底の近くから弥生土器甕が出土した。

SD7 調査区の南部に位置し、幅8.5m、深さは1.2mである。底の近くから弥生土器甕が出土した。溝の底には水流の存在を示す砂・粘土の互層が見られ、櫛田川の旧河道に伴う小河川であると考えられる。

(3) 古墳時代の遺構

SD11 調査区の北部に位置し、幅11m、深さは1.3mである。底の近くから古墳時代の土師器甕・

高杯・甌や須恵器杯身が出土した。溝の底には水流の存在を示す砂・粘土の互層が見られ、櫛田川の旧河道に伴う小河川であると考えられる。また、深さ0.3mの所から古墳時代の土師器高杯が出土した。

SK12 調査区の北部に位置し、長径1.5m、深さは0.13mである。土師器片や須恵器杯蓋等が出土した。旧用水路によって切られている。

(4) 鎌倉時代・室町時代の遺構

SD4 調査区の中央部に位置し、回遊状の溝で、幅約0.5m、深さは0.03mあり、土師器片や山茶碗片が出土した。

SD8 調査区の中央部に位置し幅約0.3m、深さは0.35mあり、土師器片や山茶碗片が出土した。

(5) 時期不明の遺構

SD13 調査区の南部に位置し、幅1.4m、深さは0.8mである。遺物は見られなかったが、土層の堆積状況から櫛田川の旧河道に伴う小河川であると考えられる。

IV. 遺物

今回の調査で出土した遺物は、整理箱にして7箱であった。これらの遺物は、弥生時代と古墳時代の2つの時期に大別できる。

以下、特徴的な遺物について概略を述べる。個々の遺物の詳細については遺物観察表を参照されたい。

(1) SD1出土遺物

弥生土器甕(1)

体部外面は細かいハケメで調整され、一部分に煤の付着が見られる。弥生時代後期のものと考えられる。

(2) SD 6 出土遺物

弥生土器壺 (2)

体部外面はケズリ後横方向のヘラミガキが施される。弥生時代中期のものと考えられる。

弥生土器壺 (3)

頸部は短く、受口状になる。口縁部外面に3条、4条の凹線紋が施され、体部には横方向のヘラミガキが施される。上村安生氏の編年第Ⅳ—4様式の受口細頸壺B IIに該当し、弥生時代中期のものと考えられる。

(3) SD 7 出土遺物

須恵器杯蓋 (4・5)

4はTK23型式に当たり、5世紀後半と考えられる。5はMT15型式に当たり、6世紀前半と考えられる。

土師器椀 (6・7・8)

6は外面はケズリ、内面にナデが施されている。7は口縁部の屈曲がなくなり、内面・外面にナデが施されている。8は口縁部が若干屈曲して開き、底部外面に木葉痕が見られる。

土師器高杯 (9)

内面にシボリ痕があり、脚部のみが残存している。

土師器台付甕 (10)

S字状口縁台付甕で、口縁部形状は既にS字状を

なさない段階のものである。山田猛氏の分類によるE類と考えられる。

土師器甕 (11~13・16)

11は口縁部にヨコナデ、外面にハケメ、内面にはナデが施される。12は口唇部が厚く、外面にナデ、内面にハケメが施されている。13は外面に縦方向のハケメ、内面には工具によるナデで調整されている。16は口縁部にヨコナデ、外面はハケメ、内面にはナデ、オサエが施される。

弥生土器甕 (15)

体部外面は粗いハケメで調整され、内面にはオサエ、縦方向のケズリが見られる。弥生時代後期のものと考えられる。

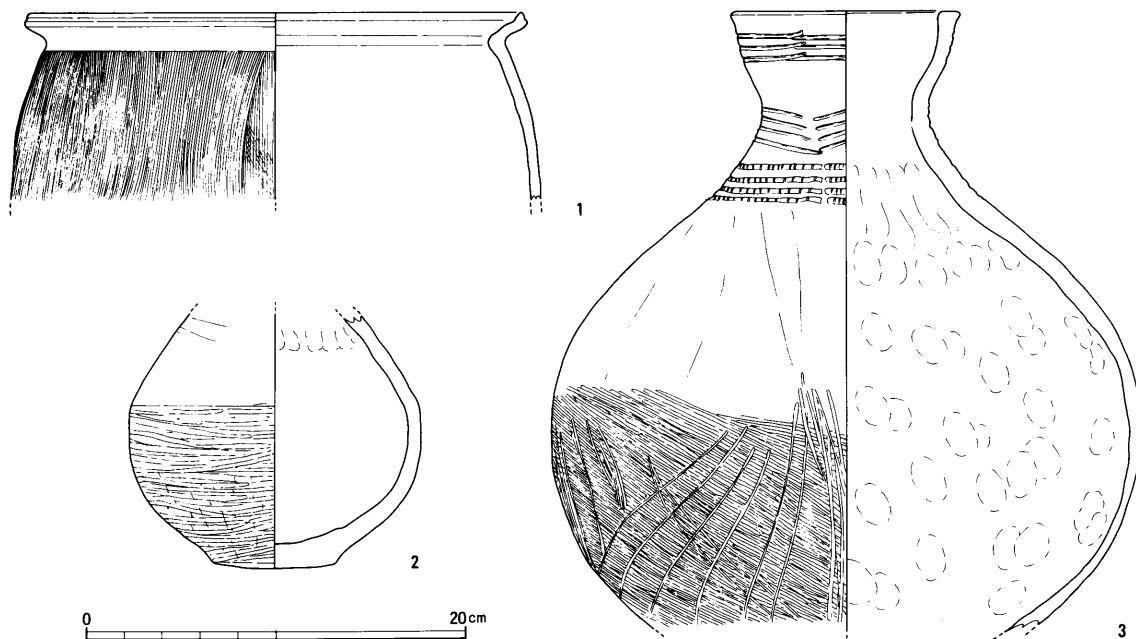
(3) SD 11 出土遺物

土師器高杯 (14)

外反して開く口縁部を有し、口縁部のみ残存している。北陸系のもので、古墳時代前期と考えられる。松阪市川井町粥鍋遺跡からも出土している。

土師器甕 (17・21)

17は摩滅が激しく、調整は不明瞭である。体部内面には粘土接合痕が見られる。21は口縁部がヨコナデ、体部外面がハケメ、体部内面上半にハケメ、下半にはヘラケズリが施される。球状の形をしている。



第5図 出土遺物実測図 (1) [1:4]

須恵器杯身 (18・19)

19には外面底部にヘラ記号がある。ともにTK47
型式に当たり、6世紀のものと考えられる。

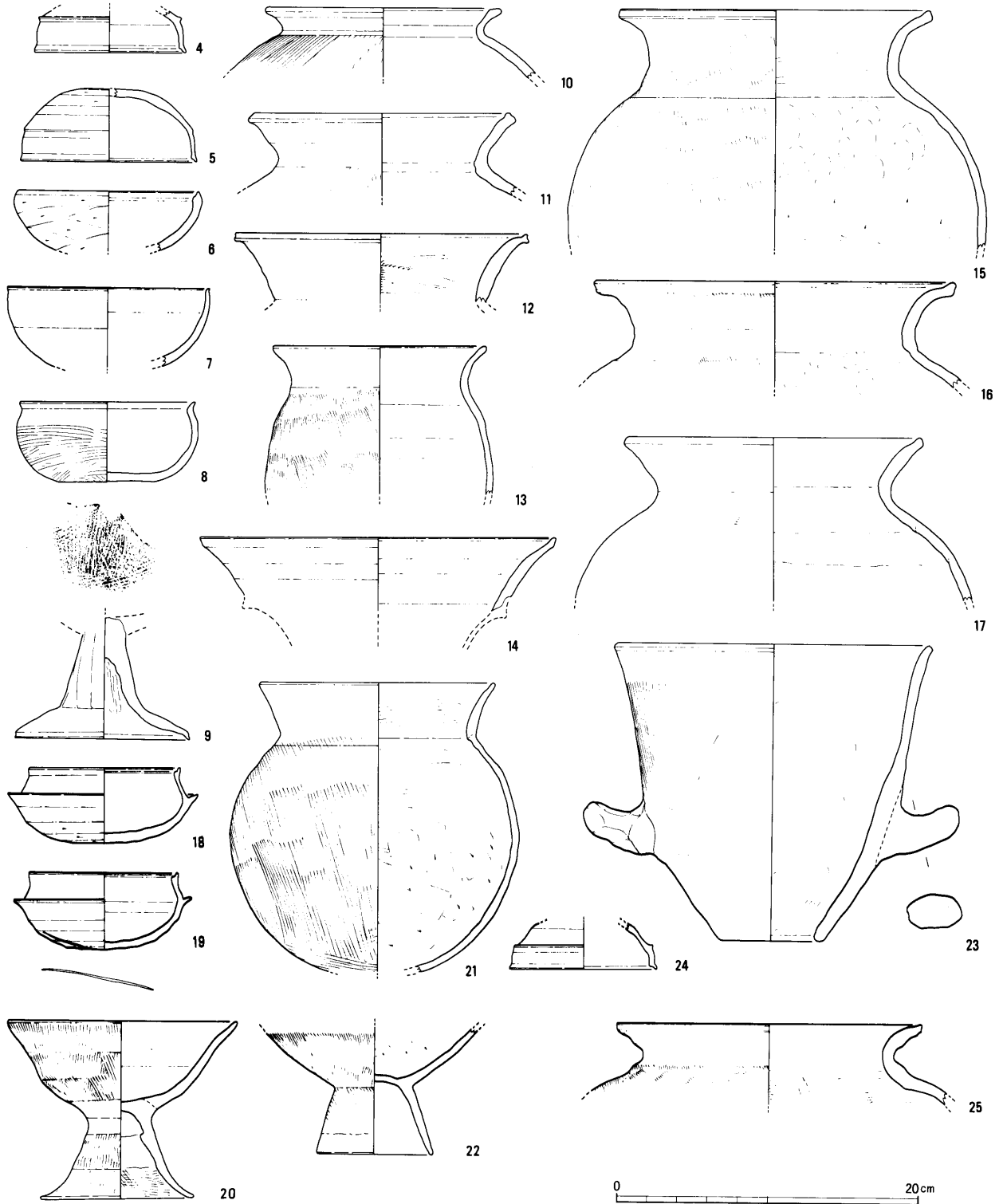
土師器高杯 (20)

口唇部が鋭く尖り、脚柱部はやや脹らみ気味でな

だらかに裾部に続く。

土師器台付甕 (22)

S字状口縁台付甕で、脚台の立ち上がり角度は、
小さくなり始める。山田猛氏の分類によるC類と考
えられる



第6図 出土遺物実測図(2) [1:4]

土師器甕 (23)

口縁部から底部まで直線的でバケツ状の小型のものである。口縁部にヨコナデが施され、体部外面にはハケメによる調整、体部内面には工具によるナデが施される。

(4) SK12出土遺物

須恵器杯蓋 (24)

TK47型式に当たり、6世紀のものと考えられる。

(5) その他の出土遺物

土師器甕 (25)

平成8年度の試掘調査の時に出土した。口縁部はヨコナデ、体部内面・外面にはハケメが施される。

図版 番号	登 録 番 号	器 種	出土位置		計測値(cm)		調 整・技 法 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調	残 存 度	備 考
			地 区	遺 構	口 径	器 高						
1	002-02	弥生土器甕	A21	SD1	26.0		内面ナデ、口縁部ヨコナデ 外面タテハケ	密	並	7.5YR8/4 浅黄橙 5YR7/4 にぶい橙	口縁1/4	体部外面に集付着
2	010-01	弥生土器壺	E22	SD6	底 径 6.5		内面ナデ、オサエ 外面工具ナデ、ケズリ後ミガキ	粗 ~5mmの砂粒含む	並	10YR7/3 にぶい黄 橙	底部完存	
3	009-01	弥生土器壺	E21,22	SD6	11.5		内面オサエ、ナデ 外面ミガキ、工具ナデ、ナデ	やや粗	並	10YR7/2 にぶい黄 橙	口縁部完存	
4	001-05	須恵器杯蓋	F22	SD7	10.0		内面、外面ロクロナデ	密	並	N6 灰	口縁1/4	
5	005-04	須恵器杯蓋	G21	SD7	11.5	4.8	内面ロクロナデ 外面ロクロケズリ、ロクロケズリ後ロクロナデ	やや密 3mm大の小石、1m mの砂粒含む	並	N51 灰	口縁1/2	
6	001-01	土 師 器 碗	F22	SD7	12.0		内面ナデ、口縁部ヨコナデ 外面ケズリ	やや粗 ~2mmの小石含む	並	2.5YR6/8 橙	口縁3/8	
7	001-03	土 師 器 碗	G21	SD7	13.3		内面ナデ、口縁部ヨコナデ 外面ナデ	密	並	7.5YR8/4 淡黄橙	口縁1/8	
8	005-02	土 師 器 碗	F22	SD7	11.5	5.3	内面ナデ、口縁部ヨコナデ 外面ハケメ、底部外面木の葉痕	やや密	並	5YR7/6 橙	1/6	
9	003-03	土師器高杯	G21	SD7	底 径 11.5		底部内面ナデ、シボリ痕 外面ナデ	やや粗 ~2mmの小石含む	並	2.5YR8/3 淡黄	脚部完存	
10	002-01	土師器台付甕	F21	SD7	15.4		内面ナデ、口縁部ヨコナデ 外面タテハケ	粗 ~3mmの小石含む	並	7.5YR7/6 橙 7.5YR8/4 浅黄橙	口縁3/8	
11	001-02	土 師 器 甕	G21	SD7	17.0		内面ナデ、口縁部ヨコナデ 外面ハケ	やや密 ~1mmの小石含む	並	7.5YR8/3 浅黄橙	口縁1/5	
12	002-03	土 師 器 甕	G21	SD7	19.2		内面ナデ、ハケ、 外面ヨコナデ	粗 ~2mmの小石含む	並	10YR8/4 浅黄橙	口縁3/8	
13	006-02	土 師 器 甕	F22	SD7	14.1		内面工具ナデ、口縁部タテハケ後ヨコナデ 外面タテハケ	やや密 1~2mmの砂粒少し含む	並	7.5YR7/4にぶい橙	口縁1/2	
14	003-01	土師器高杯	K10	SD11	23.6		内面ナデ、口縁部~外面ヨコナデ	粗~2mmの小石含む	並	10YR8/2 灰白	口縁完存	
15	007-01	弥生土器甕	G21	SD7	20.4		内面ケズリ、オサエ、口縁部ヨコナデ 外面タテハケ	やや粗 1~4mm砂粒含む	並	10YR8/2 灰白	口縁完存	
16	003-02	土 師 器 甕	G21	SD7	23.8		内面ナデ、オサエ、口縁部ヨコナデ 外面タテハケ後ナデ	やや粗 ~2mmの小石含む	並	10YR8/3 浅黄橙	口縁1/8	
17	005-01	土 師 器 甕	J10	SD11	19.4		摩擦が激しく調整不明	やや密	並	10YR8/2 灰白	口縁1/4	
18	005-03	須恵器杯身	J 9	SD11	10.0	5.0	内面~口縁部ロクロナデ 底部外面ロクロケズリ	やや密 2mm~の砂粒含む	並	N71 灰白	完形	
19	006-01	須恵器杯身	J 9	SD11	10.0	5.1	内面ロクロナデ、口縁部ヨコナデ 外面ロクロケズリ	やや密 1~2mmの砂粒少し含む	良	N51 灰	口縁3/4	底部外面にヘラ記 号あり
20	004-02	土師器高杯	K10	SD11	15.0	17.9	内面ナデ、口縁部ヨコナデ 外面ヨコナデ、タテハケ、底部内面ナデ	やや密	並	2.5YR6/6 橙 5YR7/3 にぶい橙	ほぼ完形	
21	008-01	土 師 器 甕	J 9	SD11	15.5		内面ケズリ、ヨコハケ、口縁部ヨコナデ 外面タテハケ	やや粗 1~2mmの小石含む	並	7.5YR7/6 橙 7.5YR7/3にぶい橙	口縁部完存	
22	004-03	土師器台付甕	J10	SD11	底 径 7.4		内面ケズリ、外面タテハケメ 底部内面ナデ	やや粗 細砂粒含む	並	10YR8/3 浅黄橙 10YR4/2 灰黄褐	脚部完存	
23	004-01	土 師 器 甕	J 9	SD11	20.5	19.7	内面工具ナデ、ハケ後ナデ口縁部ヨコナデ、 外面ヨコナデ、タテハケ	やや密	並	10YR7/4 にぶい橙	口縁1/4	
24	005-05	須恵器杯蓋	K 8	SK12	9.7		内面、外面ロクロナデ	やや密	良	N61 灰	口縁1/7	
25	001-02	土 師 器 甕 試 掘			20.2		内面ヨコハケ、口縁部ヨコナデ 外面タテハケ	やや密 ~1.0mmの砂粒含む	並	10YR8/3 浅黄橙 10YR4/1 黄灰	口縁1/4	

第1表 出土遺物観察表

V. 結 語

今回の調査は、狭い調査面積でもあり、琵琶垣内遺跡の一部を調査したこととなった。

遺構については、溝や土坑が検出され、当時の人々の生活の跡を確認することができなかった。また、調査区内で検出した溝は、自然の流れか人工的につくられたものか判断が難しい。東方に榑田川が流れていることから、いく筋かの榑田川の昔の流れと関連する可能性がある。調査区は、集落内ではなく、川と岸にあたると考えられる。

遺物については、弥生時代と古墳時代のものが出土した。なかでも、SD6からは榑田遺跡群北ノ垣

内地区に続き弥生時代中期に溯る土器を確認することができ、当地域における定住の開始時期を知る資料が蓄積された。今回の調査では、調査区が遺跡縁辺部にあたり、琵琶垣内遺跡の性格を明らかにする資料を得ることができなかった。

当遺跡に関連する集落跡については、昭和62年の調査で住居跡が見つかったことと、西方の丘陵地に向かってゆるやかに高くなっていることから、調査区の西方に存在すると考えられる。今後、当調査区の西側の調査が進み集落跡が発見されることを期待したい。

[注]

- ① 平成8年度の試掘調査時に、関浄寺遺跡から琵琶垣内遺跡と改称した。
- ② 野原宏司「関浄寺遺跡発掘調査現地説明会資料」（三重県教育委員会、1987年）。
- ③ 松阪市史編纂委員会『松阪市史』第1巻史料編・自然（1977年）。
- ④ 宇河雅之「瀬干遺跡」「北ノ垣内遺跡」（『瀬干遺跡・綾垣内遺跡・大蓮寺遺跡・柳辻遺跡・北ノ垣内遺跡発掘調査報告』、三重県埋蔵文化財センター、1996年）。
- ⑤ 松阪市史編纂委員会『松阪市史』第2巻史料編・考古（1978年）。
- ⑥ 新田洋『山添遺跡発掘調査報告』（三重県教育委員会、1979年）。坂倉一光「山添遺跡（第2次）」（『山添遺跡（第2次）・里中遺跡ほか』、三重県埋蔵文化財センター、1997年）。
- ⑦ 前掲③と同じ。
- ⑧ 福田哲也『山添2号墳発掘調査報告書』（松阪市教育委員会、1998年）。
- ⑨ 三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財センター年報8』（1997年）。
- ⑩ 伊藤裕之『中の坊遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1997年）。
- ⑪ 伊藤裕之「古川遺跡」（『古川遺跡・山口遺跡発掘調査報告』、三重県埋蔵文化財センター、1996年）。
- ⑫ 中川明『横地高畑遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1998年）。
- ⑬ 山沢義貴・谷本鋭次『金剛坂遺跡発掘調査報告』（明和町教育委員会、1971年）。田村陽一「金剛坂遺跡」（『昭和59年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』、三重県教育委員会、1985年）。
- ⑭ 中野敦夫「寺垣内遺跡発掘調査概要」（『第6回三重県埋蔵文化財発掘調査報告会』資料、1985年）。
- ⑮ 西出孝『コドノA遺跡・コドノB遺跡（第1次）発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1998年）。
- ⑯ 下村登良男『神前山1号墳発掘調査報告書』（明和町教育委員会、1973年）。
- ⑰ 下村登良男「河田古墳群周辺の古墳分布」（『河田古墳群発掘調査報告』Ⅲ、多気町教育委員会、1986年）。
- ⑱ 前掲⑰と同じ。
- ⑲ 精査の結果、SD2・3は攪乱溝、SD5はSD4と一連の溝、SD9は旧用水路、SD10はSD11と一連の溝と判断し、欠番とした。
- ⑳ 上村安生「壺形土器を中心とした凹線紋出現前後の土器について」（『研究紀要第4号』、三重県埋蔵文化財センター、1995年）。
- ㉑ 須恵器の編年については、田辺昭三氏による陶邑編年を用いた。田辺昭三『須恵器大成』（角川書店、1980年）。
- ㉒ 山田猛「4. 結語」（『山城遺跡・北瀬古遺跡』、三重県埋蔵文化財センター、1994年）。
- ㉓ 前川嘉宏『粥鍋遺跡発掘調査報告書』（松阪市、1987年）。
- ㉔ 前掲㉓と同じ。

図版 1



調査区遠景（北から）



調査区南側（東から）



調査区北東側（南から）



作業風景（南から）

図版 3



出土遺物（3は縮尺不同、他は1：3）

報 告 書 抄 録

ふりがな	びわがいといせき だいにじ はくつちょうさほうこく							
書名	琵琶垣内遺跡（第2次）発掘調査報告							
副書名								
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	166—2							
編著者名	奥野 実							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503番地 TEL 0596-52-1732							
発行年月日	西暦1999年3月31日							
所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
びわがいといせき 琵琶垣内遺跡	みえけんまつかかし 三重県松阪市 とよはらちゅうあざびわ 豊原町字琵琶 がいと かんじょうじ 垣内・閑浄寺 ひるば 肥留場	24204	756	34° 32' 30"	136° 34' 52"	19970916 } 19971031	600	平成9年度県営ほ 場整備事業(榎田 上地区)に伴う事 前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
琵琶垣内遺跡	集落跡	弥生時代中期 弥生時代後期 古墳時代	溝、土坑	弥生土器壺・甕 土師器碗・杯・甕・甑・ 台付甕・高杯 須恵器杯蓋・杯身				

平成 11(1999) 年 3 月に刊行されたものをもとに
平成 19(2007) 年 8 月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 166—2

琵琶垣内遺跡(第2次)発掘調査報告

1999年 3 月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター

印 刷 オリエンタル印刷株式会社